

第一部 カストロプ

章一 ウジ

「しまった、すっかりおそくなっちゃったよお」

夕暮れ時近く、帝都の一角を一人の少女が駆けていく。まだ厳冬の期のさなかとて街路のあちらこちらに白い残雪がうずたかく消え残っている季節にもかかわらず、真っ赤に上気した頬や額から流れ落ちる汗、そしてきっちりとお団子に結い上げてあったはずの、天然にゆるいウェーブのかかった金褐色の髪が、その身体の動きに合わせて吹き流れているのを見れば、彼女が相当の距離をそうして走ってきたに違いはないことは一目瞭然だった。

「まずいよ、もう暗くなっちゃうよ……つんとに、あの馬鹿、ろくに計算もできないなんて、最っ低!」

走りながら、それでも少女の声は幾らも掠れていない。年齢はおそらくは一〇代の後半。その年頃ではありふれた背格好だが、おそらく普段から身体をよく動かす生活をしているのだろう。息も余り上がってはいない。

「あいつがあんなにもたまたしなきゃ、こんな風に走って帰んなくとも済んだのに!」

瞳が一瞬毎に地平線に近づいていく太陽を映して青みの濃い緑に光った。彼女の顔立ちを最も特徴付けて、人並み外れて大きな瞳が怒りで震えて見えた。

最後の届け先は帝国軍幼年学校寄宿舎の食堂……つまり、彼女が時間通りに届けていなければ、幼年学校の生徒さんたちの今夜の食事はデザート抜きと言うことになったわけだ。

「寄宿舎に食堂が付いてるんなら、デザートも作っちゃえばいいのに……」

などとは思わない。何しろ、数は出るし、高級食材の使用を要求されるから良い売上になる。もう少し、売値に上乘せしてもクレームなんか出やしないのにと思うのだが、他のことではめちゃくちゃに厳しいオーナーも、妙に商売気を薄くしてしまうのだ。

「それだって、あいつが……」

ようやく息も切れてきた。店のあるブロックまであと二キロは切っただろうし、夕日の残照はまだ微かに街路を照らしてくれている。

足を止めて両手を腰に当て、ちょっと挑戦的に顎を突き出してから、少女は、脳裡に浮かべた幼年学校寄宿舎の会計監の顔に向かって思いっきりあっかんべーをする。いつもなら、伝票へのサイン一発で済んでいるのに、今日は担当者が休みだとか何だとか、やたらに細々と検算を始めた挙げ句に、実はろくに会計用の端末すら使えない、実に使えない親爺であることが分かるまでに約一時間。

ついにぶち切れかけて『いい加減にしろ、この〇〇親爺。計算そろばんもできないくせに、会計監なんて名乗ってるんじゃないわよ!』と喚きかけた時、やっといつもの会計係の下士官が出てきてくれて、何

とか『ブランドミューラー・ケーキ店の看板娘』の評判を泥沼に放り込んで、おもりを付けて底まで沈めてしまうような騒ぎは起こさずに済んだのだが……

これで、客回り用のバイクがちゃんと走ってくれば——この日は注文が立て込んでいた。それでも手際よく回っていけば、余裕で日暮れ前に店に帰れるはずだったし、実際、幼年学校寄宿舎に着いたのは、最初の予定よりも二〇分以上早かった。

が——最後の最後でけちがついてしまった。

確かにバイクも年代物だし、エンジンがちょっと咳き込んでいてそろそろ整備に出さないと拙いんじゃないか……と思ってたのだが、日々の多忙さに紛れて一日延ばしにしている内に、とうとう一息ため息をついたままエンジンが沈黙してしまったのだ。馴染みの整備工場に連絡したものの、こちらも仕事を立て込んでいてすぐには人手を出せないと言う。

幼年学校寄宿舎は高級住宅街の近くにある。帝都の高級住宅街の常として、公共交通機関はほとんど整備されていない。何しろ、住民は公共交通機関などをあてにしないで十分に行きたいところへ行って帰ってこられるわけだし、訪問者同士が同じ公共交通機関の中で鉢合わせというのも歓迎されないのだ。

「うちで車を出してやれるか、調べてやろう」

会計係の下士官はそう言ってくれたのだが、結局、この日の寄宿舎は何とか言う侯爵様とか伯爵様とかのご子息をご実家に送り迎えするのに車が出払っていた。タクシーというやつもあるにはあるのだが、わざわざ呼び出して、となると馬鹿高い料金……多分、少女の一月の給金の三分の一は軽く吹っ飛ぶ……を支払う羽目にな

る。

「じゃ、歩いて……じゃなくて走って帰るよ。大丈夫、まだ日が暮れるまでに一時間はあるよね？」

「一時間って、おい、お前んところの店まで一〇キロはあるだろうが？」

「それくらいの距離だったら走れるよ。故郷じゃ、いつもそれくらい、毎日走ってたから」

元氣だよ、とありもしない力こぶを作ってみせる少女に、ごつい見かけの下士官はなおも心配そうな表情を崩さなかった。案外、故郷には家族がいて、同じ年くらいの娘がいるのかも。

「分かった、じゃあ、店に一発連絡を入れとけ。わるいことあ言わねえ。迎えに来てもらえるなら、途中までも良いから迎えに来てもらえ。俺が途中まで送ってやる」

「え、そんな、悪いよ。小父さんだって仕事あるんですよ？」

「だから、ずつとは送っていつてはやれねえさ。あと一時間したらはずせねえ仕事が入ってるから、ここから片道四〇分。嬢ちゃんの脚で走れるところまでついて行ってやる。だから、できるだけ近くまで迎えに来てもらうか、公共交通機関に乗れるところまで出たら、すぐ乗っちゃおうことだ。なにせ、気をつけろよ。最近、この辺、物騒な話があつてな——」

「ぶ、物騒？」

お化けは嫌だ。辺境にある故郷の夜は暗く、怪談話には事欠かない。あることないこと話して子供達を怖がらせようという、悪趣味な大人達はお化けよりも多分、数が多い。

「お……お化け？」

「そんな可愛いもんじゃない」

殺しだよ——その一言には、さすがに気の強そうな碧青の目が怯えに固くなった。

「ちょ、ちょ、ちょっと脅かさないでよ。殺して、何なの？」

「ここ三ヶ月ばかりで三件。現場は帝都のあちらこちらだから、同じ奴の仕業だとは言えないが、若い女を狙って攫うんだ」

攫った挙げ句に惨殺する。無論、ただ殺すだけではない……省略された部分を、少女も正確に察しようだった。

「三人とも日が落ちてから、行方が消えてるそうだ」

若い女だけでなく、若い男にも手を出してくる可能性は否定できない……憲兵隊總監部からの通達を目にしたのだという。確かに幼年学校には『若い男』というか少年達。それも名の通った貴族の子弟が多く在籍しているし、彼らが門限を破って寄宿舎を忍び出るのは、これはもう『寄宿舎』と名の付く施設での伝統的な行事と云っている。とは言え、彼らに万一のことがあれば、大変な責任問題になるのも確かなことだ。

彼らに較べたら、しがないケーキ屋の職人見習いの小娘一人くらいいかなるうとも、気にする必要はないのではないか。すくなくとも、憲兵隊總監部からの指示は、出入り業者の娘を保護しろとは言っていないはずだが——

下士官の返答は明快だった。

「義務でやることじゃないんでね」

ということ、とにかく途中まで。全力疾走とは言わないが、かなりの速さのランニングで約四〇分。会計係の下士官は付いてきてくれたわけで、さらに店からは手が空いたのを迎えに出したから、

途中で落ち合えるはずだという連絡も入った。とは言え、心配そうに振り返りつつ幼年学校へ戻っていく会計係に手を振ってから約一〇分余り、ほぼ陽の落ちた郊外近くの帝都の街路を一人で行かなければならない。どうせなら最後まで付いてきて欲しかったけれど、あの下士官の小父さんにも仕事がある。開けられるのは一時間ぎりぎり。幼年学校の方へ走っていった後姿は、来た時の倍のスピードは出している。全力疾走だ。

車は……どれもこれも煌びやかに装飾された高級地上車ばかりだ。その車は何台も行き交うが、その路傍を徒歩、ではなく速歩、あるいは駆け足だが……行くのは少女一人である。ケーキ屋の白い制服だけに薄暮の中で一際浮き上がって見えた。

いきなり……だった。

迎えが来てくれているはずの待ち合わせ場所まであと数ブロック。歩いていたのは道路右側の側道。本来、聞こえてくるはずのない後ろからの地上車のエンジン音に振り返りかけた瞬間だった。

ドン——という強烈な衝撃を左肩口に受けて身体が宙に浮く。何が起きたのかも分からないままに宙を舞い、右肩から地面に叩き付けられた瞬間に再び激痛と衝撃が全身を突っ走った。

視界が混乱し、暗転する。自分がどうなってしまったのか、何が起きたのかまったく分からなかった。

「おい、ちょっと強かったんじゃないのか？」

「大丈夫さ。骨の二、三本くらい折れたかも知れんが、死ぬほどじゃない。俺の手際に間違いはないって」

人声がする。言葉に直したならともかく、耳で聞いている限り、聞いた瞬間に耳をかきむしりたくなるほど下卑た発音ばかりだが、衝撃と痛みで身体が棒のようになってしまい、首を回して目を開く、ただそれだけのこともできない。

身体を抱き起こされる。と思う間もなく、再び身体が宙に浮く。今度は抱き上げられたらしい。

そのまま横へ移動する。つまり、誰かに抱えられて運ばれている——理解できた瞬間、またしても宙に浮く感触に引き続いて、落下。そして、ひどくよくクッションの効いたソファか、ベッドのようなものに受け止められる。

「痛——」

それでもさっきの衝撃でどこか壊れたらしい。身体がクッションに受け止められた瞬間に、気の遠くなるような痛みが走った。

が——それで薄れかけていた意識が一気に戻った。

「な——に？」

最初に視界に入ったのがやけに低い天井。それが、建物の天井ではなくて地上車の天蓋であると気付いたのは、背中から響いてきたエンジン音と急激な加速感覚だった。

「え——？」

その次に視界に入ったのが、何人かの男の顔。痛みと衝撃で焦点が合わず、何人いるのか分からないが、一人でないのは確かだ。彼らが覗き込んでいる。いずれも薄気味の悪い、明らかに良からぬ目的をその視線の裏に隠していることが明らか、しかもぞっとするほどに野卑なにやにや笑いを貼り付けた顔。そして、まるで魚のように表情のない、冷たい水のような目が共通している。

「だ……だれ!? 何を——」

何をするつもりなの。変なことをしたらただじゃおかないから。ラストエンテのウジーを馬鹿にするんじゃないわよ!

調子よく啖呵を切ろうとするけれど、身体が言うことを聞かない。彼らはいきなり車の車線を変更して、車のどこかを彼女の肩口にぶつけ、跳ね飛ばした……致命傷や、すぐに治療の必要になるような外傷を負わず、ただ、身体を自由を奪うに十分な打撲、あるいは骨折を負わせる程度に巧みに減速して。

一瞬にそれだけの理解が生じると、幼年学校の下士官の言葉が脳裏に浮かび上がる。若い女性を攫って、そして……つまり、この連中が——

「こんなことして……ただで済むと思って……るの!」

それでも声は出た。ただ、いつもの勢いはなくて、語尾が微かに震えるのだけはどうしようもなかったが。

「ただでねえ……済むと思っているからやつてるわけさ。誰にも俺たちを捕まえることなんてできないし、まあ、諦めな。せめては俺たちの相手にしてもらえる幸運を、大神にでも感謝しな」

「——そう、生きてる間になあ」

果たして、というべきなのか、彼女を覗き込んでいた男たちの表情が、まるで舌なめずりしないばかりの陰惨な喜びに溶け崩れたように見えた。ただ、それでも目は変わらない。決して濁っているわけではないにしても、感情の動きを見せない、どんよりと澱み凝った目。見詰められて背筋が段々と冷たくなって来て、押さえても押さえても震えが上体に這い上ってくる。

「帝都には上級貴族も沢山住んでいる。中には警察も憲兵も手を出

せないのを良いことに、俺たちがやったなら裁判抜きで死刑になるようなことも平気でやる連中もうようよしている」

故郷^{ラスト・デ}を出る前、忠告してくれたシュタインウンターブレツヒヤーの小父さんの言葉が脳裏に蘇った。

「くれぐれも気をつけるんだ。どう気をつけると言われても困るが……万一、そんな連中に出くわしてしまったら、その時は生命あつての物種だと思ふことだ。若い娘にこんな忠告をするなど、とんでもない親爺だと思ふだろうがな、ウジー。だがな、生きていれば何でもできる。死んでしまつちゃあおしまいだ。儂らは、お前の訃報など聞きたくなんだからな」

男たちの一人が、もう一人に声をかける。車窓の外を高速で流れていく街の灯を弾いて、細く引き延ばした氷のような光が閃いた。無造作に、少女……ウジーの上着にナイフを入れ、一気に引き裂いていく。

ウジーが悲鳴を上げる暇もなく、あつという間にぼろ切れに変つたケーキ店の制服が引き千切られていく。彼らが何をしようとしているのかは、もう考える必要すらなかった。男たちの顔が湛えているのは、野卑さと劣情、さらにもっと冷酷ななにかを混ぜ合わせた、もう人の顔には見えないほどに陰惨な喜悦の表情だ。

嫌だ——絶対に嫌だ、こんな連中相手に我慢なんて、冗談じゃない。殺されたつて、絶対に嫌だ！

必死に相手の腕を振り払う。右腕は痺れたようになって感覚がなかったが、左腕は動いた。拳を固めて思いっきり振り回す。ナイフで刺されたつて構うものか——

拳が鈍い音を立てて男の一人の頬に食い込んだ。か弱い少女と

侮っていたらしい。こちらは毎日泡立て器を何百回もかき回し、重い小麦粉の袋やバターのコンテナ、焼き上がったケーキやクッキーの大量を持って店中を駆け回っているのだ。学校の成績はともかく、そこの女の子とは鍛え方が違っている。

「ぐおっ」

思いもかけぬ打撃を横合いから受けた男が大きく姿勢を崩す。上級貴族用の大型地上車らしいが、こんな乱闘におよぶには些か狭すぎる。

ナイフが宙を飛び、姿勢を崩した男がそのまま一人に横合いからぶつかる。こちらでも大きく姿勢を崩したその下半身が無防備だ。

次の瞬間、打撃音と悲鳴と、もう一度打撃音。最後の打撃音は、苦痛に耐えきれずに飛び上がった男の頭蓋骨が、車の天井と濃厚な接吻を交わす音で、最初のそれは、ウジーが力任せに蹴り出した踵が、完全に無防備になっていた彼の急所……どこかは読者の想像に任せるとして……を容赦なく突き刺した音だった。

手加減などあり得ないし、ただの少女の脚ではない。故郷では毎日一〇キロくらい平気で走り抜けていた、その脚である。何しろ学校は遠かったし、交通機関はろくになかった——悲鳴が形容に困るほどの音量と長さで複雑極まる音節で構成されていたのも当然だった。

苦痛に耐えきれず、思わず飛び上がった男は頭頂部を強かに車の天蓋にぶち当てた。目もくらむほどの激痛だったに違いない。片手で頭を押さえ、もう片方を蹴りをいれられた部位にあてがいながら、声にならない苦痛の呻きを上げてのたうち回る。

ウジーはドアのコントローラに飛びつく。とにかくドアを開く。

そうすれば異変が周囲に知れる。狼狽えた運転手が速度を落とせば、そのまま飛び出す。もう下着まで切り裂かれて素っ裸同然のありさまだが、生命がかかっているのだ。恥ずかしがっている場合じゃない。

が——開かない！ ドアレバーを幾ら引いても、ロックボタンを解除してもうんともすんとも言わない。ドアを脚で蹴りつけるが踵が痺れただけだ。かえって、右半身に走った激痛に、思わずうめき声を上げる。

「ちくしょう、開けろ、開けろったら！」

「……舐めたまねしてくれるじゃないか。ドアロックは運転席からの集中制御さ。お前みたいに生きの良いのがいて、逃げ出されたことがあったんでな」

ナイフの男だ。もう一人は半死半生で白目を剥いているが、こいつは唇の角が腫れ上がり、顎のあたりまで血の筋が引いている程度だ。頬に一発食ったくらいでは、大して効いていないし、かえってもともと乏しい自制心のたがが外れてしまっているらしい。

「お返しはしてくれるぜ。その面^{おもて}かっさばいて二目と見られない顔にしてやる。それから、目玉えぐり出して、耳と鼻を削いでやる。親にも貴様だとは分らないくらいに切り刻んでやるぜ。俺たちに逆らったらどうなるか、ゆっくり思い知らせてくれる」

長く伸ばした舌先にナイフの刃をべろりと舐め上げると、驚くほどの速さで刃を返す。男の唾液に濡れた刃が頬に押しつけられて、恐怖と同時に嫌悪に総毛立ち、ウジはドアに張り付いたまま硬直する。こんな奴に怖がつている顔は見せたくない……と思っても、目の焦点ももう合わず、精神^{こころ}の歪みそのままにいびつな笑いを貼り

付けたままナイフを構えた男を前に怖がるなという方が無理だった。

「心配するな、すぐには殺さない。自分で自分の顔だと分からなくなるのを確かめさせてやるさ。そうやって殺してくれて上下座するまで、切り刻んでやる。相手を切り刻みながらやるのが最高なんだぜ」

顎を押さえられる。その手に噛みつこうとして、今度は頬を張られた。横倒しに座席に倒れ伏したところを、今度は髪を掴まれる。視界の隅をナイフが白く走った。

——切られる！

それでも目は閉じなかった。

その時——

「——!!」

「な、なんだ!？」

身体が宙に浮く感覚。ナイフが目の前から飛び離れる。髪を掴んでいた男の手も離れた。

軽い焦げ付くような臭い。男たちの悲鳴のような叫び。一瞬、宙を舞った身体が男二人の身体を挟むようにして、前席の座席に打ち付けられる。

「なんで停まるんだ!？」

ウジの蹴りをまともに食らって半死半生で呻吟していた男がうなり声を上げた。地上車は車首を路面につっこむような急制動で停止していた。

「例の場所まで突っ走れっていったらう!!」

「交通管^ん制^んシ^ステ^ムからナビに割り込まれた。緊急停止信号だ」

「交通管^ん制^んシ^ステ^ムからの割り込みは切ってあったらう。何で割

り込まれるんだ」

「分からない……今、そいつを調べてるんだ!!」

沈黙——慌ただしく地上車のナビ……ナビゲーション・コンピュータを操作する音が響く。程なく、軽い電子音がメッセージの着信を告げた。一瞬息を呑む気配があり、ひどく慌てた声が続く。

「おい、まづいぞ。緊急検問だ」

「検問だあ?」

「この先、すぐだ。一台一台、ドアを開けさせて中を確認している」

「な——無視しろ。無視して発進させるんだ」

「駄目だ、全然反応しない。完全にコントロールを取られている。

何にもできない」

「馬鹿な——何で、今頃そんな検問を……」

車窓がノックされる。ノックと言うより、これは窓を殴っている

と言っている。

「開けろ、検問だ。開けないなら窓を叩き壊すぞ」

「へ、壊せるもんなら……」

壊してみろ、と言いたかったのだろうが、言葉尻も消えないうち

にドアのロックの外れる音が響く。

「おい、なんでロックを……」

「悪いけどね、ナビはこっちで乗っ取らせてもらったよ」

若い声だった。よく日に焼けた、あるいは軽い宇宙焼けというやつなのかも知れない、とウジーは思った。色の浅黒い、肩幅の広い、

帝国軍士官の制服と制帽の若者がドアを引き開けて中を覗き込む。

既に日はすっかり落ちており、場所は……帝都の中ではあるだろうが、どのあたりなのかまるで見当は付かなかった。外から浴びせら

れるサーチライトの光を背にして、士官の顔は逆光に沈んで細かい目鼻立ちは分からなかったが、やや華奢な頬から顎のラインと輪郭のくっきりした目と歯の白さが目を引いた。

「わきゃ!」

はっと気がついてウジーは慌てて身体を丸めかける。士官が逆光なら彼女の方は順光。しかも、ほんのさっきまで開かれたドアに身体の正面を向けた状態で髪を掴まれていたのだ。つまり、全裸同然の姿が士官の視界には丸見えというありさまで、しかも右半身の感覚がほとんどない状態ではろくに隠しようがなかった。

一瞬、士官の輪郭がぎくんと強ばり、それからギコギコという擬音が聞こえそうなほどぎこちない動きで首が横を向く。その余りにも分かりやすい硬直ぶりでウジーは察する。彼が、自分の見ているものが何かをやっと理解したのだ。

若い女の裸身をみて固まってしまふあたり、声の厳つさに反してどうやらかなり若い士官らしい……とは思ったものの、ウジーにしてから家族以外の他人に裸を見られた経験はこれが生まれて初めてなのだ。状況が状況だから、羞恥が顔に血流を集中させる、という事態にはならず、かえって頭の中が冴えきってくる。

「あ——う、うむ……ええと」

完全に完全に顔だけ横に向けた格好で、士官は何度も咳払いをする。

「これはちょっと、あれだな」

裏返った声は確かに若々しかった。

「これはちょっと、その女性に事情を伺う必要がある……な」

「——あんだと、事情だと?」

「そ、そうだ、事情だ」

漸く声が落ち着いてきたようだ。無論、視線は依然としてあらぬ方を向いたままだった。あんなに無理しなくても良いのに、とウジーは思ったが、彼女自身も余り男性の視線に曝されたくない状態にある自分を認識してはいる。士官の紳士ぶりが有り難いと言えは有り難い。

「交通管制システムからのコントロールを拒否するようナビを不正改造した車が暴走している。犯罪への関与が疑われるとの通報があった。この車だ」

「犯罪なんか関係ねえ。この女は、俺たちの仲間だ。仲間内で何をしようと、俺たちの勝手だ。警察や軍にとにかく言われる筋合いはない。女が裸だろうが何だろうが、そんなの関係ねえ」

「彼女が卿らの仲間かどうか判断するのはこっちだよ、ご令息方。事情の聴取が嫌なんだったら、彼女だけ降りてもらおう。事情聴取の結果は、あとで卿らには連絡する。それも嫌っていうなら、車ごとしかるべき場所へ来てもらうことにする」

「手前え、俺たちが誰だか分かって物言ってるんだらうな？ あとで泣きを入れてきても遅いんだぜ。正義の味方ぶるのもいいがな、その辺の所、ゆっくり調べてみてからモノを言った方が身の為ってやつだぜ、ええ、ヘータイさんよ」

「卿らの身元は確認済みだよ。だから、彼女だけ参考人としてきて貰い、卿らには行動の自由を許そうと言ってる」

士官の口許が笑う形に動く。しかし、目は笑っていないかった。

「行動の自由が嫌だって言うんなら、場合によっては緊急避難の行動ってのを選ぶ権利がこっちにもあるんだ。結果的に、卿らは私に

後で泣きをいれさせる機会を一生失う可能性もあるってところは了解してもらいたいな。その方がこっちも後腐れなくて良いかも知れないし——」

既にその右手が腰のホルスターに添えられているのにウジーも気付いた。ホルスターのカバーは外され、銃口のあたりから小さく熱対流が起きてないか？ 安全装置がすでに解除されている徴候だった。さすがに気付いたらしく、男たちが一様にぎょっとした眼差しを交わし合うのが見えた。

男たちはしばらく顔を寄せ合って相談しているようだったが、やがて忌々しげに士官からの『取り引き』を受ける旨を伝える。彼らにとってもやはり『生命あつての物種』は真実であるらしい。

「賢明な判断を歓迎するよ」

頷き、士官はウジーに何かを投げて寄越した。受け取ろうとして、ウジーは右腕の感覚がまだ失せたまままでほとんど動かないのに気付いた。実際、右半身がずきずきと痛み、右脚も思うようには動いてくれない有様だ。

「降りて来てくれないか、お嬢さん」

軍用らしいばかりでかい外套だった。身体をくるみ、辛うじて自由のきく左手だけを使つて外套が身体から滑り落ちないように気を遣いながら路肩に降りた。

「あ——失礼、忘れ物、忘れ物」

地上車がドアを閉ざそうとするのを、士官が身体を入れて止める。そのまま上体を後部座席につっこんだ。

「おい、無礼だらう。俺の車だぞ。勝手に入るな!!」

居丈高な怒声を、士官はそよ風が吹いたほどにも感じなかったよ

うだ。平然と後部座席とフロアに視線を走らせ、身分証¹カードや財布、それに伝票の端末を拾い出あげた。切り裂かれてぼろ布同然のウジの服の残骸もひとまとめにして抱え込む。

「これは、このお嬢²さんの持ち物だと思っただけ？ 少なくとも持ち主は卿³ではないだろ。どう見ても、この服なんかは女性のものに見えるけど？」

ふて腐れたように顔を背けたのはナイフの男だった。

「――そうだ」

「では、返してもらおう。異議は？」

「――勝手にしろ」

地上車から降り立つと、士官は彼らに『行って良し』と手を振る。

「名前くらい聞かせろ、ヘータイ」

横柄な誰何の声が微かに耳の底に残った。

「帝国軍中尉ミハエル・タウゼントシュタイン。憲兵総監部付きブルメンタール中将閣下の次席副官を務めている」

応じる士官の、精悍できっぱりした声が、男たちを怯ませたらしい。覚えてろ、あるいは後悔するなどの捨て台詞もなく、ひどく乱暴な音とともにドアが閉じ、地上車は盛大なエンジン音を轟かせて急発車する。あつという間にそのテールランプが他の車の流れの中にとけ込んでいくのを見送り、士官はウジを振り返った。衣服の残骸はひとまとめにビニール袋に入れ、カードと財布、伝票端末を手渡す。手袋の白さが鮮やかだ。

「あ……ありがとうございます」

あれだけ座席での大乱闘を演じた割に、IDカードも伝票端末も壊れていないのを確認してほっと息をつく。

「――!？」

思わず頭の芯がクラリと来て、それから両脚からぐりと力が抜けかける。拉致されかかっている地上車の中で男二人を相手に、しかもナイフで脅かされながらも必死の抵抗の大立ち回りを演じたものの、ウジはまだ一七歳のうら若い乙女でしかない……無論、それにしては言葉遣いが乱暴すぎる、男の急所を遠慮会釈なく蹴り潰せるなんてどうよ、という異議申し立てはすべて却下だ……。

あの二人……運転手を入れて三人は、紛れもなく異常者だった。シュタインウンターブレッツヒャーの小父さんが言っていた、『警察も憲兵も手を出せない』ような上級貴族の一族なのかも知れない。

おそらくは、ケーキ屋の見習い修行中の小娘一人くらい、犯そうが殺そうが、自分たちの思いのままと思っっているような連中の……そう思った瞬間、全身から力が抜けた。助かった……取り返しの付かない傷を負わされることもなく、生命を失うこともなく、思いもかけぬ絶体絶命の窮地から脱出できたのだ。そう思った瞬間に、安堵と疲労と恐怖と苦痛が一斉に蘇ったようだった。

外套に身体をくるまれたまま抱き上げられるのを、辛うじてウジは感じていた。もし、万が一にもこの帝国軍士官もまた、さっきの連中と同類だったら、後門の狼の顎⁴を逃れて、前門の虎の口の中にまっしぐらに駆け込むような状況だが……さすがにもう、ウジにはそれ以上の気力が尽きていた。

ウジの、この夜の記憶はそれで一旦途切れた。

☆☆☆

翌日、軍病院を訪ねたミハエル・タウゼントシュタイン中尉を出

迎えたのは、開けっぴろげなと表現してもなお足りないほどに明るい笑い声だった。

「失礼する」

さして大きな袋を小脇に抱え直し、病室のドアを軽くノックする。

「はい。鍵はかかってないよ!」

これは脳天気というべきなのか。昨夜、あれだけの目に遭って、この屈託のなさは一途……それとも部屋を間違えたのか、俺は——と思わず病室の名札を確認するミハエルだった。少なくとも病室を間違えたわけではないし、患者の名前は確かに昨夜、この病院に預けたあの少女のものだ。

ドアを開く。

「ああ、来てくれたんだ」

ベッドの上に上半身を起こした少女は、まだ肩から右腕を厚く包帯とギブスに包まれ、頭部にも包帯が幾重にも巻き付けられた上に、大きなリヴァ・テープが右頬の半分を覆っている。昨夜受けた暴行の後もそのままの痛々しい姿なのだが、満面に浮かべている笑顔には欠片の暗い影もない。赤毛……正確には赤みの強い金褐色の髪が午前中の陽光を弾いて、きらきらと煌めいているかのようにさえ見えた。

「タウゼントシュタイン中尉さん……だよね?」

ほとんど青に近い碧の目が真っ正面から彼を見据えた。

「名乗ったっけか?」

「あたしには名乗ってくれなかったけれど、あいつらに……」

嫌いな犬を見つけた猫のように鼻面に皺を寄せ、少女は初めて吐

き捨てる口調になる。

「あいつらに名乗ってたのを聞いたよ。憲兵隊総監部付きブルーメンタール中将副官のミハエル・タウゼントシュタイン中尉だつて」

「よく覚えてたなあ」

さすがに驚く。あの時、彼女はショックと苦痛で既に失神寸前だったはずだ。肉体的な条件が普通であったとしても、あの状態での会話を正確に覚えていられるとすれば大したものなのだ。

「記憶力は良いんだ。学校の勉強はできなかったけど。でも、勉強が嫌いだったんじゃないよ。勉強があたしを嫌いだったんだ。勉強より、ずっとしたいこともあったし」

「だから、ケーキ屋に修行に入ったつてわけか?」

やっと話のきっかけを見つけてミハエルはほっとする。実際、この少女のような屈託のない明るさは嫌いではないし、それに、少女の顔を見るのがどうにも面映ゆい。あの車の後部座席を引き開けた時、まさか彼女がああ言う姿にされているとは思っても見なかったのだ。慌てて視線をそらした……と言いたいところだが、有り体にはしばらくの間、視線を釘付けにされてしまった。つまり……この少女が生まれたままの身体のライン全てを曝しているところに、だ。思い出すだけで顔面の血流が上がり、動悸が上がってくる。もし、そのことを指摘されて恥じらわれたり、見てしまったことを詰られたりしたら、もうそれでどうして良いか分からなくなってしまうに違いないのだ。

「その、座って良いかな」

「いいよ、どうぞ」

ベッドサイドの椅子を引き寄せ、ミハエルは腰を下ろす。ベッド

脇に大きなスポーツバッグが置かれ、枕元の花瓶には活けたばかりとおぼしい花束が鮮やかな彩りを見せている。

ウジもベッド脇に視線を投げ、頷いた。

「ずっとちっちゃい頃からの夢だったんだ。随分反対はされたんだけど、シュタインウンターブレッチャーの小父さんが父さんと母さんに意見してくれて、もともと父さんも上級学校へ行くより手に職付けた方がいいって言ってたしね。それで、三年前に帝都^{オーストリア}まで出て来て……ブランドミュラーさんちに紹介してくれたのはシュタインマウラーの小父さんなんだ。夕べだってブランドミュラーさんが自分で荷物届けに来てくれたし、今朝も花も持ってきてくれた……って、えっと……？」

そこまで一気にしゃべって、ウジは思い出したようにミハエルをまじまじと見詰めた。ぼろりと落ちてしまうのではないかと思うほど大きな目の中で、やはり大きな輪郭の瞳がほんの少し碧^{みどり}を含んだ青。全体にふっくらと丸みを帯びた顔立ちに、浅い小麦色に日焼けした肌がいかに健康そうだ。高からず低からずな鼻梁の周囲に薄くそばかすが肌の色に溶けていた。ミハエルは一瞬、言葉をなくして、くるくるとよく動くその表情に視線を固定されてしまった。

「何か訊きに来たんじゃないかって、中尉さん？」

「あ……ああ」

無理矢理にウジの顔から視線を離して、ミハエルはポケットから端末を取り出した。見舞いは無論のことだが、その前に公務というやつがある。

「今更だけど、ミハエル・タウゼントシュタイン中尉だ。憲兵隊総監部のブルーメンタール中将の次席副官が本来の仕事だ」

「副官ってなにをするの？」

「要するに中将閣下の秘書だな。スケジュール管理と書類の整理、その他雑用係」

例えば、夜中に寝酒のワインを買いに走ったり、二日酔いの上司をたたき起こして会議の席に押し込んだり、あるいは上司が何日も放りっぱなしにしている書類に目を通して要点を報告して決裁のサインをもらったり……そういう仕事である。中尉と言えば駆け出し士官だが、副官職は上級士官としての知識や見識も要求される。中々に大変な仕事でもある。

「大変だね」

「それが仕事だからな。ケーキ屋だって、ケーキを売るだけが仕事じゃないだろう？」

「それは……うん、そうだね」

小麦粉の袋って重いんだよ。バターだって、ミルクだって、一抱えもあるコンテナやバケツみたいな容器で届く。大きな量販店ならともかく、こぢんまりした町のケーキ屋である。材料を運ぶのも、仕分けするのも、下ごしらえするのもみんな人手なのだ。

「……全部人手でやれるから、ブランドミュラーさんちに住み込ませてもらったんだ。その方が、自分で店を開く時、ためになるでしょ？ブランドミュラーさんは師匠^{アウクレルター}の資格も持ってるし、見習いの修行で認めてもらえたら、職人試験^{マイスターエグザメン}にも推薦状を書いてもらえるんだよ」

「そいつは凄い」

ミハエルは素直に感嘆する。職人試験^{マイスターエグザメン}に通り、専門職^{シユペリアリスベマイスター}人の資格を取るの、至難とは言わないまでも相当以上の難関なのだ。

「職業は菓子職人見習い……で、名前は？」

もう知ってると思ってたけど……ウジィは言う。病室にも名札が出ているくらいだし。

「憲兵隊の正式の事情聴取だからな。形式だと思ってくれればいい」

「ウジィだよ。ウジィ・プレーツェン・ザーネヘルシュテラー」

「ウルシュラ・プレーツェン・ザーネヘルシュテラー……出身星系はラストエンテ、だろ？」

ただでさえ大きな目が更に大きく瞳られる。本当にそのまま瞳がぼろんと転げ落ちるのではないかとあらぬ心配をしてみた。実際にそんなことが起きたら、それはそれでかなりシュールな光景だろう。

「ウジィという愛称が使われるのは、帝国ではラストエンテ星系だけだからな。昨日、聞いただけでラストエンテの出身だって言うのはすぐに分かった。ラストエンテならウジィはウルシュラだし、ザーネヘルシュテラーじゃなくてザーネルシュテラーって読みになるはずだ」

「そりゃ……だって、女の子の呼び名が牛^{ウシ}だなんて最っ低じゃない！」

「そんな風に思うのはラストエンテの人間だけだと思うぞ」

「なんでそう思うの？」

「俺もラストエンテの出身なんだ」

「え——？」

さらに目を瞳る……という訳にはいかない。もう限界一杯まで目を大きくしているのに、これ以上、目を大きく瞳ったら、本当に目尻が裂けてしまう。シュールではなくて、これはもうホラーの世界

だ。

ミハエルの内心の危惧をよそに、ホラーな光景が目前で展開されるということはなかった。ただし、ウジィの目はまん丸くなったままだった。蒼く澄んだ目がびくりするほど綺麗に見えた。

「じゃあ、タウゼントシュタインって、あのタウゼントシュタイン？」

「本家じゃない。分家の、そのまた端っこさ。両親が早くに亡くなったんで、工科学校まで 本家に引き取られてた。ヘル・シュタインウンターブレッヒャーやヘル・シュタインマウラーのこともよく知ってる。まあ、知ってるって程度だけどな。言つとくが隠してたわけじゃないぞ」

ラストエンテ星系。帝都から、イゼルローン回廊宙域に向かって約三〇〇〇光年近く離れた、一言で言えば『辺境』の一星系である。叛徒領への大親征時、コルネリアス一世自らのお声掛けりで開発されたのだから、その歴史はすでに一二〇年余りを数えることになる。当初は、ラストエンテなどとは呼ばれておらず、イゼルローン回廊を挟んでの叛徒との戦いへの主要な兵站基地としてそれなりの繁栄を見た星系でもある。

この星系がラストエンテと呼ばれるようになったのは、帝国暦四〇〇年前後。帝国内のある種の人々が集団でこの星系へ移住させられて以来のことである。

ヤン・ウェンリーは、自由惑星同盟を代表する用兵者として後世に知られることになるが、よく知られている通りに歴史への深い造詣の所有者だった。彼が士官学校在学中に発表のあてもないままに書き遺したメモワールの一つに、帝国と同盟の公用語に関するもの

がある。このメモワールの内容は、その後、偶然の結果から世に知られるようになるのだが、銀河帝国成立以前に人類社会で使われていた言語が約三〇〇〇種類にもおよぶこと。帝国成立後も、その過半は消滅せず、何らかの形で伝えられていること。言語の系統が何十かの種類二分可能であり、それによってそれぞれの言語を使う人々の、地球での発祥の地が大まかに特定できることなどを述べたものだった。

ヤンは、この研究を、その膨大な読書……濫読と評する史家も多い……の中でまとめ上げたのだが、士官学校生徒という身分の制約上、実地のフィールドワークに徴しての検証にまでは手が及んでいない。

そして、ヤンの研究を実証する証拠が、現在ラストエンテに居住する人々だった。

ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムによる銀河帝国の樹立に伴って成立した帝国公用語は、ルドルフの古ゲルマン趣味のしからしむるところ、古ゲルマン系言語がその基本となるのは当然のことだった。当初は、ゴールデンバウム王朝の宮廷語として極く私的に使われ始めたのだが、まず帝国の支配階層となった門閥貴族にとっての公用語となった。支配階層がそれを公用語として使う以上、帝国支配を支える官僚組織や軍事組織もまた右に倣わざるをえない。その後、ルドルフの自己神聖化が際限もなく進行する中で、帝国全般に『公用語』としての使用が強制されるようになるまで僅かの期間しか要さなかった。

当然のように、銀河連邦時代の共通語だったアングロ・サクソン系言語や、それ以外の系統の言語は、それらの言語を使うこと自体

が帝国、あるいは帝室への反逆意思の表明と見做されるにいたり、急速に廃れていったのである。

とは言え、地球時代から数千年にもわたって慣れ親しんだ母国語への決別を拒否する人々は数十億人の単位で存在した。ルドルフ、あるいはルドルフ以上に彼の神聖化を推し進めたノイエシュタウフェン公ヨアヒム、第二代皇帝ジギスムント一世は彼らを目の敵に弾圧を進め、帝国内の言語統一を図った。が、人類が地球から宇宙へと携え出た三〇〇〇を超える言語の多くは、それらを忘れがたい自らの祖先の遺産として継承する人々の手により、数百年におよぶゴールデンバウム王朝の時代を生き延びてきたのである。

「ウシーが牛の意味になる言葉があるから、ウジーの方が良いなんて言ったら、名前なんて付けられないと思うがな」

ミハエルは言うが、一旦そういう話が広がってしまうと、娘にウルシュラ、あるいはウルズラと名付けた親たちは彼女たちを『ウシー』とは呼ばなくなり、代わりに定着したのが『ウジー』だったというわけである。

「そうかも知れないけど、呼ばれる側の気分の問題だもの。男の子だったら気にもしないだろうけど」

さすがに女の子と言うべきか、ウジーも妥協しない。一瞬、笑顔が消え、左手を腰について睨むように胸を反らせたが、すぐに表情を緩ませた。

「ホントなら、タウゼントシュタインさんちの人にはウジーって呼んでもらいたくないんだけど、あんたは別格にしとく。命の恩人に恩知らずなことを言っちゃいけないもの」

それに……とウジーはミハエルに向かってとんでもない一言をさ

らりと投げかけた。

「それに、あたしが初めて裸を見せた男の人だしね」

ミハエルの顔がいきなり紅い染料を投げつけられたようになった。

「あ……う……知ってのか」

「だって、見え見えだったモン。ほかに見てびっくりしそうな物なかったし——」

見る見る首筋から頬、耳たぶを真っ赤に染め始めて視線を泳がせてしまうミハエルに、ウジは声を立てて笑った。

「やだなあ、中尉さんってば純情っ！」

「お、おいっ、からかうのは止めてくれ！」

「だって、中尉さんにもなって女の子の裸一つ見てないなんてことないよね」

「そ……それは……」

帝国軍は基本的に男性社会である。ミハエルは故郷の工科学校を卒業して士官学校へ転じたが、その工科学校に通う生徒もまた九九パーセントまでが男子だった。そういった学校の中では、必然的に生徒の間で様々な情報が交換されることになり、その中には当然ある種の禁止的画像が大量に含まれるわけで……ただ、そうした画像にくらべても昨夜のこの少女の姿は——考えかけ、ミハエルの顔面がさらに真紅の塗料を塗りたくったようなありさまになった。

「あ、やつぱり……この、ど・す・け・べ！」

勘弁してくれ……ミハエルはあっさりと白旗を掲げる。とても口ではウジにかかないそうになかった。

余程おかしかったのか、ウジは包帯とギブスに包まれた身体をよじるようにしてしばらくは笑いを止められなかった。

「だから、ウジって呼んでくれて良いよ。もともとフロイラインなんて柄じゃないモンね」

ようやく笑いを止め、目尻に浮かんだ涙を拭って、今度は大きく頷いてみせる。ただし、その頬から耳たぶまでが健康的な血の色を透かしているのは、ただ笑いすぎたからだけではないのだが、勿論、ミハエルは気付かない。

「——そいつは……どうも、済まない。俺も別にシュタインウンター・ブレッツヒャーさんたちに悪意はないし、帝都まで出てきて、故郷の事情を引きずっていがみ合うなんて馬鹿馬鹿しいと思ってるんだ」

帝国の弾圧に耐えて、帝国公用語以外の言語を密かに伝え続けてきた人々にとって、自由惑星同盟の成立は大きな光明となった。ヘルベルト大公率いる帝国軍がダゴンで壊滅し、その後の『暗赤色の六年間』で帝都が大混乱に陥ると、彼らは続々とイゼローン回廊を、フェザーン自治領が成立するとフェザーン回廊を経て同盟領へと亡命して行つた。多い時期には、年に億を超える亡命者が船団を連ねて帝国を脱出していったという。

大親征に失敗したコルネリアス一世は、帝国辺境宙域への統制力を強める目的で帝国軍を再編し、大貴族の私兵部隊編成を奨励すると共に、亡命予備軍である人々をフェザーン回廊宙域からイゼローン回廊宙域へ大量に移住させた。

「我が始祖ルドルフ大帝陛下のお定めになった公用語以外の言葉を使うような者どもは、この世の果てへまともに放逐するが良い」

コルネリアス一世のその言葉が、彼らの強制移住先の新たな名前となって定着するまで数年を要さなかった。イゼローン回廊宙域まで約一〇〇〇光年弱。二つの有人惑星を擁する星系が、こうして

ミハエルとウジの故郷となった。

イゼルローン回廊宙域近くへ強制移住させられたことで、ラストエンテの住民はごく自然に二つの派に分かれることになった。一つは、あくまで母国語の保存と使用に拘り、最終的には帝国からの亡命または分離独立を図ろうとする一派であり、他方は母国語に対する態度は同じでも、可能な限り帝国と折り合いを付け、帝国内での存続を考えようとするグループである。故郷を同じくしていても、両派の中は決して良くはない。無論、目の敵にし合って抗争を繰り返す、などということはなかったのだが。

イゼルローン回廊宙域近くで大量の亡命は不可能という地勢の関係上、ラストエンテの主流派は後者であり、その指導者と言うか中心になっているのがウジの後見人であるシュタインウンターブレヒヤーやシュタインマウラーといった人物である。一方、ウジが驚いたように、『タウゼントシュタイン』は前者の主導的立場をとり続けている一族だった。

「知ってるけど、興味ないよ」

もっとも、その辺の事情についてはウジの関心外のようなだった。

「あんたはどうなの、中尉さん？」

「俺も……実は余り興味はない。士官学校へやってもらえたのは確かにタウゼントシュタインの家のおかげだけど、だからと言って帝国に向かってどうこうしようって気にはなれないな」

ウジは笑う。随分嬉しそうだった。

「じゃ、あたしたち、少なくともお友達にはなれるってことだね」

「まあ、そうだ……で、お友達になる前に、もう少し聞かせてくれ。悪いが、夕べのことだ。あの車の連中について証言して欲しい」

随分脱線してしまったが、この任務はブルーメンタール中将直々の特命である。ウジを相手に少々時間をつぶしてしまっても、まあ事情聴取に時間がかかったと言えば、それはそれで問題はない。問題があるとすれば、あの車の連中である。

ウジの表情がちよっと暗くなった。

「証言って、裁判か何かなの？」

「違う、ここで連中の似顔を作る。その証言だ。多分、裁判は……ないと思う」

「やっぱり……」

「やっぱり……って、何でそう思うんだ？」

「だってさ、あいつら良い車に乗ってたし、着てるモノだって物凄くお金かかったよ。つまり、アレなんじゃないの。偉いところの貴族の○○○○などら息子……」

ミハエルの苦笑が更に苦くなった。実にウジの言う通りなのだ。

「おっと、それ以上は言いっこなし」

ミハエルは人差し指を口許に当てた。

「なんで」

「知りすぎるとよくないこともあるってことさ、ウジ」

元々は、帝都の一角で続発している若い女性の拉致と暴行殺人犯の調査と追捕への協力。報道管制が敷かれているから、一般には知られていないが、すでに一〇人以上の犠牲者が出ている。帝都の警察本部から憲兵隊への協力要請がなされ、ブルーメンタール中将副官のミハエルを初めとして数十名が応援にかり出された。

特命を受けてミハエルが最初にやったのが、帝都の交通管制システムからの制御を切り離している車のピックアップとその位置の把

握だった。幸い、交通管制システムの管制室にもラストエンテの出身者がいて、ミハエルとは士官学校時代からの知り合いだった。

「女の子が一人、攫われたかも知れない」

その報せが入ったのは幼年学校付きの下士官からだった。帰りが遅くなり、しかもバイクが故障して歩いて店まで帰る羽目になってしまった少女を途中まで送ったが、気になって迎えに来るはずの店の人間に連絡を取ったのだが、出会えていないというのを聞いて、すぐに連絡を入れてきたのだ。

後は簡単だった。連絡のあった地点付近の不審車両とその動きを捉えて、車の所有者の割り出しと検問の設置は見事に間に合った――が、車の素性が明らかになった時、ミハエルは天を仰いでしまった。あの三人が、帝国でも名だたる門閥貴族の連枝さまであることが分かったのだ。

「こりゃあ、下手すると生命取りだな」

車の連中ではなく、彼自身にとって……である。いくら憲兵隊総監部付き将官の副官を務めていても、ミハエル自身は二三歳の一介の中尉に過ぎない。上官であるブルーメンタール中将にしても、帝国屈指の門閥貴族のお坊ちゃま……ウジীর言葉を借りれば、○○○○などら息子……を相手に部下を庇ってくれようとは思っても思えない。

であれば、後は自身とウジীরと、ウジীর働くケーキ店に累が及ばぬよう立ち回るしかないではないか。実は既に、件のお貴族様からはやんわりと、昨夜の『憲兵隊の暴走』について抗議が入ってきているのだ。

しばらく不得要領に眉の根に八の字の皺を寄せていたウジীরだが、

その辺のところは察したらしい。包帯の下で濃い金褐色の髪をびこびこと縦に動かして慌ただしく頷く。

勘が良いな――ミハエルは感心する。

「じゃ、頼む」

ミハエルは端末を起動した。

『絵を描く』と言っても、ペンや鉛筆で描くのではない。ウジীরのしゃべる言葉を端末……とそれにつながったシステムが解釈し、似顔絵に仕立て上げて立体表示させるのだ。写真ではなく、昔ながらの線画なのは、その方が対象者の印象を正確に伝えることができるからだ、というのはシステム担当者からの受け売りである。

ウジীর自身が言うように彼女の記憶力は確かだった。結局二時間余りかかって、看護婦に『患者の昼食時間をじゃましないで下さい』と追い立てられることになったが、出来上がった画像はミハエルが嫌になるくらいに容疑者の○○○○などら息子どもにそっくりだった。

「こんなんで大丈夫なの。相手はアレなんでしょ？」

ウジীরは不安気になっていた。故郷^{ラストエンテ}では余り感じることはなかったが、帝都での門閥貴族の力の大きさ、横暴さ。彼らにかかっては一介の平民の生命も権利も何もゴミ以下の扱いしか受けない帝国の社会制度。そういうものを肌で感じているに違いなかったから、たかが一枚の画くらいで何ができるのかと思うのも当然だった。「証拠はこれだけじゃない。一応、決定的な証拠も押さえてはある。画を描くのに協力してもらったのは、あんたもそのことを知っているかも知れないと相手に思わせるためさ」

そう、昨夜、敢えてウジীরを先に降りさせ、あとで彼女の持ち物

を回収したのは、車の中を調べるためだった。座席やフロアから密かに吸引した塵芥の類からは、これまでの被害者のDNAが複数確認されている。彼ら三人が例の事件の犯人であることの決定的な証拠だった。

無論、証拠があっても彼らを罪に問うことなどできないだろう。迂滑なことをすれば、ミハエルやウジを初め、関係者は抹殺され、証拠は隠滅される。であれば、彼ら自身のみを守る武器として使うしかないだろう。そう、例の抗議に対しては、そうした証拠がすでに確認済みで、下手に表沙汰にすればお大事の坊ちゃま方にもひどく不愉快な事態を招くことになる……かも知れないと応じている。この絵はだめ押しだ。

「悪いことにはならないようにする。信じてくれ」

「分かった。信じるよ、中尉さん」

「ダンケ、ウジ。長い時間、悪かった。ゆっくり休んでくれ」

「うん……あのさ……」

頷いた時、その表情が急に青ざめて、らしくもなくひどく強ばって見えた。ミハエルは返しにかけていた踵を止める。

「なんだ？」

「あたし、治るかな」

「え——？」

「これだよ」

ギプスに包まれた右の肩から腕に、ウジは目をやった。

「折れてみたいなんだ。全然指が動かないし、医者せんせいにちらって聞いたら、かなりひどいらしいって。右手が動かなくなったり、そうでなくてもうまく動かなくなったりしたら、お菓子もケーキも作れ

なくなるんだ。そうになったら困るな……」

「あ——ああ」

「治るにしたって、長いこと入院だとかりハビリだとかするお金はない……」

語尾が震えて視線が下へ落ちる。肩が小さく震えていた。

言葉を探して、しかし、何も見つからずに絶句したままミハエルが立ち尽くしている内に、金褐色の頭がぼつと上がった。既に、泣き出しそうだった表情は消え、きつぱりと唇を噛みしめた視線が真っ直ぐにミハエルを見据えてきた。視線の強さに、ミハエルは思わず半歩だけ後ろに下がってしまう。

「そんなことを考えててもしょうがないよね。頑張るしか、ないんだもの」

「あ、ああ、そうだな」

馬鹿みたいに頷くしかなかった。察してしまったのだ。

無理してるんだな——と。

ひどく苦手だったが、励ますように笑ってみせるしかなかった。

「そうさ、大丈夫さ。きつとな」

「また、見舞いに来てくれるよね、中尉さん。ううん、店にも来てよ、美味しいケーキがいっぱいあるから」

「分かった。また、来る。約束する。それから……」

中尉さんというのは止めてくれ。ミハエルと呼んでくれ……普通ならそう言うべき場面だろうが、その一言は出なかった。中尉さんで悪いことは何もないし、そもそもウジに『ミハエル』と呼ばれるシーンを想像しただけで、何か首筋まで赤くなりそうな気分陥ったミハエルだった。何でそこで赤くなってしまうのか、分析は

敢えて拒否したが、これはもう自明だった。

病院の廊下を玄関に向かいながら、ミハエルは確信していた。絶対に、自分は彼女が退院するまで何度も見舞いに来るだろう。無論、憲兵隊総監部所属の中尉としてではなく、ミハエル・タウゼントシュタイン個人として、この病室を訪れることになるだろうことを疑わなかった。